



受験生の皆さんへ

◇今回は、鈴木多門さん（京都大学法科大学院卒業）のレポートです！

1 はじめに（簡単な自己紹介）

こんにちは。僕は、平成24年3月に関高校を卒業しました、鈴木多門といいます。僕は高校卒業後、1年間の浪人を経て、京都大学法学部、京都大学法科大学院へ進み、今年の3月に修了（卒業）しました。その後、5月に司法試験を受験し、無事合格することができました。この後は、12月からの司法修習（現場研修のようなものです）を経て、法曹（弁護士・検察官・裁判官）の道に進むこととなります。つまり、現在は、5月の司法試験終了から11月までの、人生で最も長い夏休みの真っ只中ということになります。夏休みといっても、学生という身分もなければ、何か職があるわけでもないの、ただただ暇です（無職のせいでクレジットカードの審査も落ちました！）。でも、実家の家事を手伝ったり、旅行に行ったり、映画を観たり、ジムに通ったり、新聞を隅から隅まで読んでみたり、それなりに有意義な時間を過ごしているつもりです。そんな今日この頃です。

2 司法試験を目指したきっかけ

司法試験を受験したということで、法律や試験のことについてお話をしたいところですが、関高のクラスメートで同じく今年の司法試験に合格した小林君が非常に分かりやすく説明してくれているので（「活躍する卒業生77」参照）、そこは割愛することとして、ここでは、僕がなぜ司法試験に挑戦したのかについて、お話したいと思います。

僕の司法試験受験のきっかけ、それは、中学生のときに観た『HERO』というドラマ・映画です。普通、法律家を目指すきっかけといえば、社会に対する問題意識とか、幼いころの強烈な体験等を思い浮かべますが、僕はそうではありませんでした。『HERO』は、木村拓哉さん演じる久利生公平という破天荒な検察官が、どんな些細な事件でも全力で立ち向かい、解決していくという物語です。そこで描かれている久利生、つまりキムタクが、むちゃくちゃカッコよかった。もちろん、フィクションなので、実際の検察官が久利生のように仕事をしているわけでは決してありませんが、中学生の僕は、「検察官ってすごくカッコいいな」「法律を勉強すれば自分も久利生になれるのか」などと単純に考え、憧れました。

もともと、その憧れのまま司法試験を受験したわけではありません。大学・法科大学院で刑法や民法のような基本的な法律を学び、法的思考の面白さを実感しましたし、特に法科大学院では、実際の弁護士・検察官・裁判官の方々と交流を重ねることでそれぞれの職業の魅力を肌で感じることもできました。そうして、法律に携わる仕事をして困っている方々を助けることができれば幸せだなと考えたので、法曹を目指すことにしたのです。

でも、「きっかけ」となると、やはり『HERO』が一番初めに浮かびます。『HERO』は、フィクションとはいえ、法曹としてとても大切なことを教えてくれている気がします。例えば久利生は、困っている人がいれば、事件の大小に関わらず必ず自らの足で行動します。例えば久利生は、自分が納得いくまで徹底的に調べ尽くします。例えば久利生は、体裁やメンツを顧みず、真実を追求します。ここで「例

えば」というのは、以上のようなことは検察官に限らずどのような法曹にもあてはまると考えるからです。依頼者や当事者という生身の人間を前にしたとき、法曹は、その人の人生を左右する力を持ちます。そんなとき、久利生のように真剣に真正面から事件や人と向き合うことのできる法曹が理想であると、僕は考えます。

これからは、僕が久利生のような“HERO”になれるよう、頑張っていきたいと思います。

3 受験生の皆さんにお伝えしたいこと

と、僕の話ばかりしていてもしょうがないので、ここでは、受験生の皆さんに、二点だけ、お伝えしたいことがあります。

まず、「きっかけなんてそんなもんだ」ということです。将来どのような仕事をしたいのか、どの学部に行きたいのかが、いまいち分からないという方がいらっしゃると思いますが、それは当然だと思います。なぜなら、いま行っているのは大学へ行くための受験勉強であって、大学で専門的に勉強する分野とは関係のないことが多いし、数日行ったオープンキャンパス程度で大学がどのような教育・研究を行っているのかなんて知りようがないからです。したがって、僕の場合の『HERO』のように、何かを目指すきっかけは本当に些細なことでもいいと思います。また、自分が決めた大学・学部に入って勉強してみたら、「何か違うな」と後悔することがあってもいいと思います。そこからの方向転換は、自分の頑

張り次第でいくらでもできるからです。僕の法科大学院の友人でも、高校を中退して引きこもっていたけど一念発起して大学受験をし、29歳で司法試験に合格した人や、大学を卒業して企業に就職してから稼いだお金で大学院に通い、同じく司法試験に合格した人もいます。要は、“物は試し”です。いろいろなことに挑戦すればいいと思います。

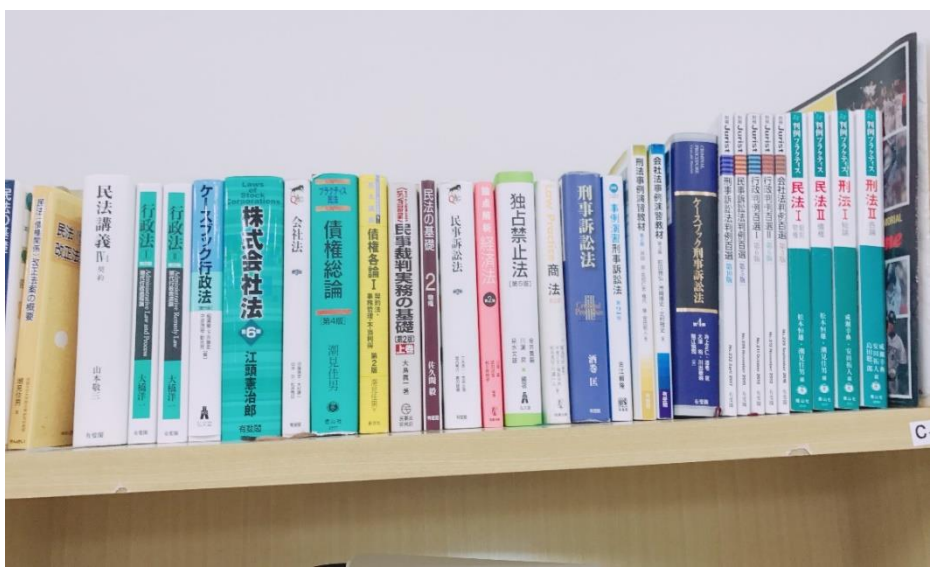


大学卒業時、野球サークルの仲間たちと

もう一つ、「背伸びをしてほしい」ということです。僕は、自己紹介でも述べましたが、浪人をしています。それは、現役の時に京大受験に失敗したからです。「失敗」といいましたが、そういうのもおこがましいほど、背伸びをした受験だったと自分では思っています。模試ではよくてもC判定で、難解な国

語や数学の問題は解ける気がしませんでした。でも、背伸びをし続けて浪人1年間を努力した結果、背が伸びました（笑）。高い目標を置いていたことで、自分の力をより一層伸ばすことができたのです。また、司法試験も同じです。僕は学部時代、法律の専門科目の点数が伸びず苦労しましたが、絶対に司法試験に受かるという高い目標を常に掲げて努力したので、なんとか合格レベルに押しあげることができました。受験生の皆さんは、どうでしょうか。高い目標を掲げているのでしょうか。安全圏内の大学に受かるための受験勉強をしていないのでしょうか。僕は、それではダメだと思います。経済的事情や行きたい学部との関係もあるため、実際には安全圏の大学に出願せざるを得ない場合もあるとは思いますが、せめて受験勉強だけは、ぜひ高い目標を維持して努力してもらいたいです。それは確かに骨の折れることですが、必ず受験本番で生きるし、今後の人生の糧にもなります。また、さらに言えば、経済的に余裕があり、親御さんのご支援があるのであれば、第一志望校の合格を目指す浪人を強くお勧めします。勉強だけをひたすらし続ける浪人の1年間は、司法試験の勉強以上に辛いものでしたが、そこで経験した壮絶なプレッシャーは今でも僕の原動力だし、そこで同じ目標に向けて切磋琢磨した仲間は、今でもかけがえのない親友です。僕の高校時代もそうでしたが、どうも関高生は浪人に対して消極的だなと感じています。学校の教育方針や受験指導方針にも関わるので、あまり口出しすると先生方に叱られそうですが、本当にそう思います。長い人生というスパンで見れば1年程度の遅れなど大きなビハインドにはならないし、むしろ、そこで得られる前述のような経験値が自分を助けることが多々あります。加えて、学歴という点においても、浪人をお勧めします。学歴だけが人生じゃないし、それだけで人を評価するつもりはさらさらありませんが、(その是非はともかく)今でもやはり学歴がある程度ものをいう時代です。実際、大学の友人や先輩・後輩は、京大生というだけで相当有利に就活を進めていました。

以上の二点が、受験生にお伝えしたいことでした。



大学院の自習室

4 おわりに

今、自分の文章を読み返してみると、まだ社会人にすらなっていないのに本当に偉そうなことを言っていて腹が立ちます。。ということで、一卒業生の戯言として受け止めてくれれば幸いです。

最後に、、『HERO』、ぜひドラマも映画も観てくださいね！